

## 高田高校の地理教師 山崎静雄先生のご逝去を悼む — 個人史的回想 —

志村 喬 (上越教育大学)

2015年2月17日<sup>1)</sup>、新潟県立高田高校で永らく地理の教鞭を執られた山崎静雄先生が、退職後にお住まいの埼玉県ふじみ野市で逝去された。高田高校でのご在職は1953(昭和28)年から1988(63)年までの35年間にわたり、楽しい地理の授業を通し多くの高田高校生(以下所謂「高高生」として略記)に、地理の学問的・社会的価値を伝えられた。その結果、大学で地理学を専攻した卒業生は多く<sup>2)</sup>、私もそのうちの一人である。高田高校校友会東京支部関係者を通じて訃報を得たのが葬儀当日朝で、参列はかなわなかった。この場でご逝去を悼み、個人史的回想を記すことで最後のお別れをしたい。

### 高田高校までのご経歴

山崎静雄先生のご経歴・研究歴は、ご退職と同時に副会長を退かれた新潟県社会科教育研究会の機関誌における特集「山崎静雄先生略歴・研究歴」<sup>3)</sup>に掲載されているのでくり返さないが、ご経歴に関して都立国立高校ご卒業であることを付記しておきたい。国立高校出身であることは、同校で地理教師を勤めておられた相澤善雄先生もしくは日原高志先生からお聞きし、その後、山崎先生へお尋ねして確認した記憶がある。兵庫県西宮市生まれの先生が、国立高校へ入学された経緯は存じ上げないが、上越市板倉区出身のお父様の仕事の関係ではないかと推測している。高田高校での地理授業では、地名「国立」の由来が、国立と立川との間にあるからであること、国立駅前が放射状の都市計画街路であること、中央線のこの区間が日本の鉄道で最も直線距離が長いことを教わったが、今思うと国立高校在学の経験から熱が入っていたように思う。

1950年4月、先生は東北大学理学部地理学教室へ進まれる。この代は旧制最後の地理学教室6回生で同級卒業生は金窪敏知氏・中村功氏・長谷川典夫氏であり、山崎先生を含め4人であったという<sup>4)</sup>。私がお聞きした所では、先生は当初、国土地理院などでの地図作成の道への希望がおありのようだった。しかし視力が良くないため諦め、気候学がご専門の設楽先生の指導の下で卒業研究をされたようである。そして、1953年高田高校(全日制課程)教諭として着任された。

---

1) 季刊地理学, 67(1)p.93の訃報記載では2月16日であるが、本稿では校友会メールニュースで伝えられた日付で記す。

2) 私が知る比較的近い年代の高田高校卒の地理学研究者だけでも、吉越明久氏・藤巻正巳氏(両氏とも立命館大学地理学教室教授)、渡辺満久氏(東洋大学教授)がいる。また、2005年から2006年まで国土地理院長を勤めた矢口彰氏も高田高校卒である。これら諸氏をはじめとした高高生の地理学関係界での活躍を話す時、先生は実に嬉しそうだった。

3) 『社会科学研究紀要』第23集(1988) pp.250-251.

4) 金窪敏知(2015): 田山利三郎先生を偲ぶ。地図 53(2)p.44による。なお、金窪氏は後に国土地理院長、長谷川氏は東北大学地理学教室教授になられた。

## ロング先生の愛称で親しまれた地理の名物先生

長身の山崎先生は「ロングさん」との愛称で、多くの生徒から慕われた高田高校の名物先生だった。地理授業の様子はご退職時に拙文<sup>5)</sup>として寄稿したが、地理教育の観点で若干補足したい。一年生時最初の地理の授業は「地理を学ぶには、遠回りの精神が必要である！」との名言(現地訪問・観察する好奇心と行動力が地理では大切との意)から始まり、空中写真の立体視を一時間も自由に初体験させることによる歓喜と内発的発見の導出、校舎屋上での山脈スカイラインスケッチ作業により高田の地理的特性を納得させた後に山名由来レポート作成へ誘うなど、一学期当初の授業で私たちは地理学習の愉しさに魅了されていった。結果的に、地理学専攻に進まずとも、地理は面白かった、本当は地理をやりたかったとの声は同級会でしばしば聞く。

一方、内容はアカデミックな地理学にしっかり基づくものであった。私にとって印象的だったのは、一学期中間査の最初の問題が、『「地理学は、( )学と( )地理学とに大別される。』( )内に入る適語を答えよ。』であったことである。考査後の解説・復習を併せれば、受講生全員が高校1年生段階で、地誌学と系統地理学の存在を学んでいた<sup>6)</sup>。また、集落地理の授業内容が、学会誌「地理学評論」誌上で当時なされていた都市化論争をふまえていたことを、大学進学後知り、先生の研究姿勢に驚いた。さらに、夏休み前には「高田高校の生徒になったのですから、夏休みには岩波新書を数冊は読まなくてはいいませんか。先輩は皆何冊も読んでいますよ。本町にある書店「春陽館」に沢山あるので、是非購入して読みましょう。」と高高生になった私たちのプライドを上手に擽り、競って春陽館で岩波新書青版を購入・読破させた。私の場合、これが契機で岩波新書・文庫を手取るようになり、高校2年時には大学で授業を受けることになる貝塚爽平先生の名著『日本の地形』を読むことになった。

## 山登りを通しての教育－高田高校ハイキングクラブ－

山崎先生を慕う高高生の中でも、先生と一緒に山登りをしたハイキングクラブ員はとりわけ強い絆を持った。山崎先生は高田高校着任直後から山岳部顧問等で山登りをされていたようである<sup>7)</sup>。しかし、山岳部と異なり、日帰り山行を基本としたハイキングクラブというお洒落で女子生徒も引かれるクラブを設立されたのは1973年(昭和48年)度であった。1973年度は1970(昭和45年)高校学習指導要領が施行された時であり、この時にクラブ活動が必修と定められた。全高校で、所謂「必修クラブ」をカリキュラムに明確に位置づけることが求められたわけで、各校とも苦慮した事柄であった。高田高校の場合、教員の得意分野(内実はやりたいこと)を活かしたユニークなクラブがいくつも設立され<sup>8)</sup>,

5) 志村喬(1988)：社会科教室での山崎先生。社会科研究紀要,23,p.253。

6) 今後機会があれば、保存している地理考査問題を分析したいと考えている。

7) 直江津雪稜会編(1976)『笹ヶ峰・火打山研究』での所収論文にある。なお、同書籍は、刊行時に先生から紹介され、社会科準備室へ伺い購入させていただいた記憶がある。

8) 生物の先生が設立された「野草を食べる会(クラブ)」は、校内に生えている草を食べてみる会で、その発想と行動・活動はユニークであるとともに楽しいものだった。その他には、先生方が空き時間によく楽しんでいた将棋や碁のクラブもあったような気がする。

その一つがハイキングクラブであった。顧問は、山崎静雄先生に加え、同じ社会科で政治経済がご専門の長澤静雄先生。お名前はお二人とも「静雄」である一方、長澤先生は背丈が150cm弱と低く対照的、「ロングとショート」と渾名される名コンビのお二人であった<sup>9)</sup>。両先生のお人柄の下、男女クラブ員が和やかに集い山々を歩くハイキングクラブは、高高生にとって大変魅力的で人気クラブであった。必修クラブは第一学年時のみの履修で卒業要件は満たすため、多くのクラブの会員は1年生のみであった。しかし、ハイキングクラブだけは2年生、3年生になっても継続する者が多く、1年生よりも上級生の数が多かったのは、人気の証である。

1976(昭和51)年に入学した私は1年生の時、ハイキングクラブの噂を聞き加入希望した。しかし、「人数が多すぎて山行に支障がでますね。他のクラブでいい人は移って来ませんかねー」との山崎先生の悩み(お願い)を、素直に受け入れ加入を諦めた。しかし、山崎先生の地理授業の魅力と同級生クラブ員の楽しそうな山行話を聞く度に加入への思いは募るばかり、2年生春に再度出願し加入許可を得、3年時9月の卒業山行までほぼ皆勤で参加した。校内で、このクラブは山岳部以上に挑戦的で危険と隣り合わせな山行も行うとの噂があったが、その冒険が私たち高高生にはたまらない魅力と充実感をもたらしてくれた。顧問の、山崎先生、長澤先生の事故時の責任問題には全く思いが及ばない当時の私たちであったが、お二人ともそのような雰囲気は全く感じさせず、その姿勢には教師となった今驚かざるを得ないと共に有り難い限りである。

生徒の立場から感じたこのクラブの特長は、山行企画・立案・遂行を全面的にクラブ員へ任せてくれたことと、各自が山にかかわる楽しみや研究課題を主体的に見いだすことを薦められたことである。その成果は、クラブ誌『銀稜』<sup>10)</sup>に収められた高高生の山行記録・感想文、研究論文に見て取ることができる。第4号によれば、1973年度に創設されたハイキングクラブは1986(昭和61)年度をもって幕を閉じたが、二年間以上所属・活動したOBは約60名にものぼり、世界中で活躍しているOBの様子を聞くのは先生の愉しみであった。

1998(平成10)年12月25日付けで、「『銀稜』第4号原稿執筆のお願い」が先生からOBへ突然届いた。私たちは、遅れていたクラブ誌を先生が刊行されるのだと思いそれぞれ投稿。その結果、翌1999年4月14日付けで私たちは『銀稜 第4号』を手にした。そこで驚いたのは、「ハイキングクラブOBの皆様へ」と題された添え状末尾に4月19日に埼玉県へ転居することが控え目に記されていたことだった。高田から、お子さんのおいでで埼玉県へ転居される直前に4号を刊行し、それと併せて初めてOBへ連絡されたのである。驚いたOBら何人かが急遽相談の結果、同年6月、「『銀稜4号』出版記念 ロング先生・長澤先生を囲む会」が高田で開催され約40名が集まった。クラブ体験を通して先生・仲

9)長澤静雄先生は「ロングとショート」と題した回顧文を記しており、当時のクラブと高田高校の様子がうかがえる。長澤静雄(1999)：ロングとショート。銀嶺、第4号,pp.6-7.

10)新潟県立高田高等学校ハイキングクラブ誌『銀稜』は、創刊号が1977年1月(グラビア2頁を含め全97頁)、第2号が同年2月(グラビア2頁を含め全43頁)、第3号が1978年3月(グラビア2頁を含め全56頁)、第4号が1999年3月(グラビア6頁を含め全76頁)が刊行された。全て山崎先生編であり、編集・経費など全てにおいて先生のご尽力・負担は多大であったはずである。



高田高校ハイキングクラブ ロング先生と長澤先生を囲む会

前列左から4人目が山崎先生，5人目が長澤先生(1999年6月26日 於：割烹「やすね」高田)

間と強い絆が出来たからこそ出来たことであり，卒業後20年振りのクラブ員の集であった。

『銀嶺4号』の巻頭論文「山行の記録と回想」冒頭，山崎先生はクラブを次のように総括されている。

「ハイキングクラブの活動は山行を中心として行われた。しかし，山行後の感想文の執筆や山岳関係文献の読書，山に関する研究レポートの作成，機関誌『銀嶺』の発行，1回だけだったが山村調査など，山のもつ文化的側面の活動にも力を入れた。山行前の計画書の作成，後の記録の作成などはもちろんである。」  
(p.2)

先生が，山を通した幅広いクラブ活動で私たちの教育を目指し，その達成のために払われたご努力には，お礼の言いようもない。

### 学校教育界での地理学・地理教育研究の先導者

1979(昭和54)年春，先生に相談もせず東京都立大学理学部地理学科に入学した私であったが，ここでも山崎先生との縁を感じる事となった。最終的に私が選んだ研究室は人文地理学研究室であったが，当時の教授は渡辺良雄先生。渡辺先生も奥様の玲子様も東北大学地理学教室出身で，山崎先生の先輩とのこと(渡辺先生は2年上，奥様は1年上)。渡辺先生のお宅で奥様にお話しすると，山崎さんは飲み会で東北本線の駅名を東京から全

部諳んじる芸が得意で楽しかったと、学生時代の姿を識ることができ嬉しかった。

しかしご無沙汰していた私が、山崎先生に再度教えを直接請うようになったのは教育実習でお世話になった大学院1年の時からである。教育実習では、思い返すと本当に拙い地理授業をしていた。しかし、先生はいつもの穏やかな口調で、さりげなく問題点を一つだけに絞り示唆するだけで、実習生の情けない心情を上手くもり立てて下さった。これも、多くの高生を成長させた教育手腕であったと今思うし、それは新潟県高校地理教師となった後も続いた。

1985(昭和60)年度に新潟県立高校の社会科・地理教師として採用になった私へ、山崎先生は6月頃お願いと称した連絡を下さった。内容は、「妙高高原町史を調査執筆しているが、分担している分量が多いので手伝っていただけませんか。貴方は商業地理がご専門なので商業部分を是非分担して欲しい。」とのこと。教え子にもかかわらず、対等な教員・研究者として丁寧をお願いされ戸惑うと共に、お断りすることなど思いも及ばなかった。この調査執筆では、山崎先生とともに地域の社会科教育研究をリードされてきた久保田好郎先生<sup>11)</sup>へ紹介されたことを始め、県内の社会科・地理教育界の方々と知己を得ながら地域の地理教材研究を始める契機をつくっていただいたといえる。

とりわけ重要な場面は、私自身の地理教育研究の出発点となった県内版地理教材改訂の契機をつくって下さったことである。1987(昭和62)年8月20・21日(木・金)、当時新潟駅近くにあった公共宿泊施設「ニュー越路」で、新潟県高等学校教育研究会社会科部会の地理分科会幹事会が開催された。新米幹事の私も参加したこの会では、販売部数が低下した分科会編集の高校生用地理教材『新潟県高等学校地理資料集』を、この先どうするかが主要論題であった。議論が見込まれる当日の昼、山崎先生は私を昼食に誘って下さった。そこでの伝えられた話は、「志村さんたち若い方々は、新しい県版教材をつくりたいとの気持ちをお持ちですね。ならば、若い人たちに全面的に任せると会議の時に私が提案します。年齢条件としては40歳未満とします。宜しいですね。」というもの。事前に全く相談されていなかった私は、大いに戸惑い、「40歳未満という条件は、どうなのでしょうかね？」と聞き返した。すると、「今回は、全て若い人に任せましたのですから、この条件がいいのです。」と、先生としては珍しいはっきりした口調でお答えになったことが強く記憶に残っている。当時の私は26歳、50半ばを迎えた今になりようやく、本当に適切な英断をいただいたと受け止められるようになった。『新潟県高等学校地理学習帳』と改題した新教材が1989年4月に刊行されるその後の経緯は、編集委員長を務めた西山耕一先生の

---

11)山崎先生とともに上越地域の地理研究をすすめた久保田好郎先生(1923-2009)の経歴・業績については、次が詳しい。阿部真隆・市村理子・加納隆徳・渡邊優輔・曾我尚子(2008)「上越地域における社会科教育の実践—地域素材の教材化を中心に—」筑波大学大学院修士課程教育研究科教科教育専攻社会科コース編集・発行『自然と暮らし』,15号,pp.109-135。山崎先生の退職特集号にあたる新潟県社会科教育研究会編『社会科教育研究紀要』23号(1988,p.253)に久保田好郎先生は「博学にして好奇心旺盛な学徒」と題した文章を寄稿しており、内容項目は以下であった。「1. 該博な知識で指導：①専門の地理学については、極めて広く深い知識で指導された。②徹底した文献を読破する姿勢は敬服する。③さながら生き字引的存在である。2. 徹底した研究に終始：①目標の設定と構想の立案に卓越した力を発揮された。②事前調査の徹底を誇り、常に万全を期した。③アカデミックな研究に終始した指導であった。」ここからは、同僚社会科教師からの高い先生への評価がみとれる。

報告<sup>12)</sup>にある通りである。

この、学習教材を地理教師仲間で集まり編集・刊行した経験が、新潟県の多くの若い地理教師世代を育成したことは衆目の認めるところである。同時に、私個人にとっては、地理教育研究を本格的に目指す契機であった。あの先生の提案がなかったら、学習帳刊行も今の私もない。

### 的確で建設的な研究評価が記された便り

論文・報告等を記し公開するようになってからは、抜き刷りを必ずお送りしてきた。先生は、直ぐに目を通されお返事を下さるのが常であった。その内容は丁寧であるとともに、研究水準に対しては的確で、社交的な抜き刷り交換で終わることも多い研究者同士よりも有り難いと感じることが多かった。例えば、雑誌「地理」の書架を担当し始めた2008(平成20)年春、先生は拙文への感想を交えて、書評原稿の執筆方法に関するご意見を述べられ、その後の執筆において大変参考になった。また、グラフィカシー概念をめぐる拙論<sup>13)</sup>に対しては、貴重な労作と評価された上で「訳語としていろいろ提案されていましたが、こなれた言葉ではありませんが、「地図力」がいまのところ一番適当と思います。・・・。第1図ですが、景観写真はありますが、どうして航空写真はないのでしょうか。地球儀、地図、模式図など伝統的なものはみなあります。航空写真を欠くことは大きな疑問として残りました。」<sup>14)</sup>と課題を指摘下さった。

本誌『新潟地理フォーラム』についても、創刊号からお送りしてきたが、必ずお返事と感想をいただき、刊行経費への援助も同封されたことが多々あり恐縮した。

ところが、2010年頃から、お返事が届くのに時間がかかるようになり、封書形式から短い葉書に便りも代わった。お葉書での文面には、健康不調である旨が若干記されるようになり、とりわけ、ロサンゼルス出張先からお送りした絵はがきに対するお返事<sup>15)</sup>の文面「ロサンゼルスからのすてきな便りありがとうございました。行きたいと思いながらとうとう行けずに終わりそうです。」には心が痛んだ。この間、お目にかかりたいと電話でお話した時もあったが、なかなか機会がつかれないままお別れとなってしまった。

埼玉県へ転居された数年後の夏、ふじみ野のマンションへ訪問し、「富士山がよく見える武蔵野らしいこの場所の雰囲気が入っている。」といったお話しをお聞きした。暑い日にもかかわらず帰り際にはマンションの外まで出てお送りいただいた。青空の下、教室や山でと同じように優しく微笑みながら手を振っていた先生が私にとって、最後のお姿となってしまった。

---

12) 西山耕一(2005)：新潟県地理学習帳の経緯。新潟地理フォーラム 2004－創刊号－。pp.29-36。なお、西山先生は山崎先生の後任の高田高校地理担当教師として着任されている。

13) 2006.06：英国地理教育におけるグラフィカシー概念の書誌学的検討。地図,44-2,pp.1-12

14) 2006年10月19日付けでいただいたお手紙。

15) 2013年4月18日受けのお葉書。お葉書は高田高校で同僚の美術教師、村山容陽先生の絵はがきであった。先生と奥様は村山先生の絵を愛され、マンションのお部屋に飾られるとともに、いただく絵はがきにも多かった。

### 自ら研究し生徒を全人格的に育てる地理の先生

『新潟県地理学習帳』を編集し始めた1987(昭和62)年10月、雑誌「地理」が戦前の長野県諏訪中学校(現諏訪清陵高校)の名物地理教師「三澤勝衛」の特集号<sup>16)</sup>を刊行した。すると、西山耕一先生とともに編集委員会を主導していた島吾郎先生が、私に次のように話しかけてきた。

「山崎静雄先生は、現代の新潟県の三澤勝衛だわね。俺はそう考える。教わった志村さんも、そう思うだろう。」

周知のように、三澤は全人格的な地理教育実践を行い、多くの有為な卒業生を育てた。三澤にたとえるのは失礼かもしれないが、やはり私たち地理授業を受けた高高生にとっては、三澤と同じ存在『「地理」の「教師」』であったと言いたい。

山崎静雄先生は、地理授業と山行を通し、知らず知らずのうちに私たち高高生を大人へと育てて下さった。私たちが成人し五十路を過ぎた今、先生は黄泉の国の山を巡り地理を愉しんでおられるのだろう。

山崎先生、素晴らしい体験を本当にありがとうございました。  
先生の安らかなご永眠を祈念しております。

(2015.08.31 記)

---

16) 地理編集部(1987)：特集 風土の教育者 三澤勝衛. 地理, 32(10), 古今書院。